

兵庫県立歴史博物館本「源平合戦図屏風（一の谷合戦図）の 〈絵語り〉に関する覚書（二）

井上 泰

一 はじめに―前稿の振り返り

本稿は、兵庫県立歴史博物館本「源平合戦図屏風（一の谷合戦図）」（一七世紀）の〈絵語り〉に関する統稿である。

前稿^{*}では、本屏風絵の画面が霞によって、①右上部から中央上部（主に坂落）、②中央部から右下部（平家の城郭・館と生田の森の合戦）、③左上部から左下部（主に坂落後の浜戦。ただし、坂落前の「二之懸」のモチーフも混在。）の三つに大きく分けられることを確認した上で、画面①に描かれている義経が老翁と対面し道案内を乞う場面から坂落の場面までの絵相に検討を加えた。その結果、次のことを指摘した。

（一）本屏風絵は、『平家物語』や『源平盛衰記』などの物語場面を、本文に忠実に描くのではなく、当時観念化されていたであろう大夫黒に乗った義経をもって描き、さらに義経に続く兵士達を描くことで、大将として坂落に向かう義経の姿を語り出している。

（二）その後の場面は坂落の場面まで描かれていない。その代わりに、坂落の場面まで、霞や山の稜線、岩肌によって鑑賞者の視線が誘導されるようになっていいる。そして、その誘導によって、鑑賞者は義経を鴨越のふもとから見上げるようなかたちで発見することになる。本屏風絵制作主体は、鑑賞者が義経を鴨越の上に突如として現れたと見るように、坂落の見せ方を工夫して描いている。

（三）（一）と（二）から、画面①は義経や義経の坂落を焦点として語っている。

課題も多く残ったが以上のことを指摘した。

本稿では、前稿では検討が加えられなかった画面②（次頁参照）なお、屏風絵の全体や個々のモチーフは、兵庫県立歴史博物館HP「ひょうご歴史ステーション」「絵解き 源平合戦図屏風」で紹介されており、画像を詳細に見ることができ（る）を取り上げたい。

前稿でも指摘したように、②は霞が途切れ、坂落の場面と平家の城郭・館がつながっている。つまり、分節化された画面と画面が接合する箇所を含むところであり、本屏風絵全体において重要なこ



るでもある。

では、どのような絵相が描かれ、絵相は何を語り出しているのか。その（絵語り）の解明に向けて、②の絵相に検討を加えていきたい。

二 指差しの兵―絵画独自の語り

坂落から平家の城郭・館にかけていくつかの図像が描かれているが、その中で特に目を引くのが、館の屋上にのぼり、坂落の方に腕を伸ばして指差している兵である（左図）。指差しの方向には、今まさに坂落をしようとしている義経軍がいる。本図像からは、義経軍

を発見した時の驚きや慌てようが伝わってきてそうである。

では、坂落直前の義経軍を平家の兵が屋上で発見するという場面は、『平家物語』にあるのだろうか。結論から述べると、管見の限りではそのような場面はない。百二十句本『平家物語』や『源平盛衰記』（以下、『盛衰

記) などには、轡越の上から馬が落ちたことにより、源氏が背後から攻めてくるのではないかと慌てふためく平家の様子は語られていないものの、屋上で義経軍を発見するという場面は、物語テキストでは語られていない。したがって、本図像は本屏風絵独自の語りということになる。

では、なぜ本屏風絵では指差しをする兵が描かれているのだろうか。それは、鑑賞者の視線を坂落の場面に誘い、様々な場面の中で本場面を特に際立たせるためだろう。一の谷合戦に関わる様々な場面を取り集めて描く本屏風絵において、指差しの図像は、ある特定の場面に注目させるには効果的である。指差しの図像によって、鑑賞者の視線は坂落に注がれる。それによって、坂落直前の場面が強調されることになるだろう。

次に、そうした本屏風絵の特異性について検討したい。本屏風絵のように、指差しによって坂落に注目させる屏風絵は、他にあるのだろうか。ケルン東洋美術館本「一の谷合戦図屏風」(一七世紀前半)を分析した論考の中で、興味深い指摘がある。^{＊2}

画面右上に指を指す人物がいる。これは鹿を指しているようにも見え、その向こうの義経軍を指しているようにも見える。どちらにしてもこの人物のみが館の後側を見ているようだ。一人だけが後側を見ている描写から、他の人々がまったく無防備であったことが際立つ。また、坂落としがまさに行われようとしていた時の場面であることがはっきりしてくる。

平家の館の後に居て、指差しをしている人物について分析しているところの引用である。その人物は山から落ちてきた鹿を指しているように見えるが、義経軍を指しているようにも見えるという。そして、そのことで「坂落としがまさに行われようとしていた時の場面であることがはっきりしてくる」という。

このようにケルン本は、本屏風絵と同じように、指差しによって坂落を強調しようとしている。指差しという方法で、坂落を強調しようとしているものは、同時代の屏風絵においてあり、本屏風絵独自の語り口ではないようだ。

しかし、本屏風絵のように、平家の兵が直接発見しているものは管見の限り見当たらない。義経が坂落をするまでに平家側がそれを発見するという文字テキストの物語を脱した語り、そして、他絵画テキストよりも直接的に坂落を鑑賞者に注目させようとする語り、それらが本屏風絵の特異性であるといえよう。また、そこから坂落の場面をいかに象徴的に描くかといった本屏風絵の指向性をうかがうこともできるだろう。

三 義経の馬落とし―絵画制作主体の対話

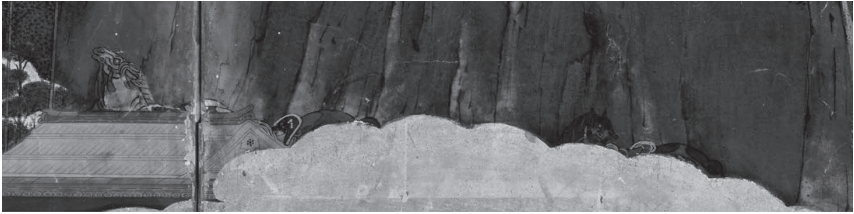
指差しの兵によって、平家の館と坂落とが線で結ばれる。鑑賞者の視線は、平家の兵から坂落へ、またその逆へと誘われるだろう。そうした坂落と平家の館とを結ぶ線に、干渉するかのように描かれている図像がある。それは、館の背後にいて画面左上に頭をもちあげている馬である(次頁参照)。坂落と平家の館とを結びつけて見る

鑑賞者にとって目に入りやすい位置に配置されている。では、本図像は何を語っているのだろうか。『盛衰記』には、義経が坂落を躊躇う兵共に、「一つは馬の落ち様をも見、一つは源平の占形なるべし」と言っており、二頭の馬を落とす場面がある。

▼『源平盛衰記』

軍将、宣ひけるは、「一つは馬の落ち様をも見、一つは源平の占形なるべし」とて、葦毛馬に白覆輪、白ければ白旗になぞらへて源氏とし、鹿毛の馬に黄覆輪、赤ければ赤旗になぞらへて平氏とて追下す。(中略―引用者) やや暫くありて岩の上より宛転び下り、越中前司盛俊が仮屋の後に落ち着きて、源氏の馬は、這ひ起きつつ身振ひして、峰の方を守り二声嘶え、篠草はみて立ちたり。平家の馬は、身を打損じ、臥して再び起きざりけり。(傍線は引用者。以下同じ。)

ここで注目したいのは馬の区別で、整理すると次のようになる。



源平	毛色	鞍	落ちた後の様子
源氏	葦毛	白覆輪	
平氏	鹿毛	黄覆輪	
			這ひ起きつつ身振ひして、峰の方を守り二声嘶え、篠草はみて立ちたり。
			身を打損じ、臥して再び起きざりけり。

こうした区別が、本屏風絵の馬の描きわけと類似している。頭をもちあげている左の馬の色は、くすみや剥落でよく分からないが、尻懸周辺の部分は白色系の色が残っている。また、その右手には鞍と尻の部分だけが見える馬がもう一頭描かれている。その馬は、鞍の縁が金で覆われた金覆輪で、毛色は茶褐色で鹿毛だと思われる。まとめると次のようになる。

配置	毛色	鞍	見え方
左	白色系	不明	
右	茶褐色	金覆輪	
			頭を画面左上にもちあげている。
			頭・胴は×、鞍・尻の部分だけ○

このようにみると、先にみた『盛衰記』の馬の区別と、本屏風絵に描かれた馬のそれとが類似しているのがわかる。このことから、本屏風絵に描かれた左上方に頭をもちあげている馬は、嘶き立った源氏方の馬だと考えられる。一方で、頭や胴が見えない馬は、臥して起き上がれなくなった平氏方の馬だと考えられる。このように、二頭の馬は、坂落直前の義経の馬落としによる「占形」の結果を

語っているように思われる。

さて、そのように二頭は読むことができるのだが、実は、もう一頭、少し離れたところに描かれた馬がいる。黒色系の毛色で、金覆輪の鞍を置き、顔は画面に向かって右を見ている。二頭からやや離れた場所に配置され、さらに二頭の方に顔は向けられていない。では、この馬はどのような馬なのだろうか。

覚一本『平家物語』では、義経が馬の落ち方を見るために馬を落とし、無事に着地し、身震いして立った馬が「三疋」と語られている。この「三疋」という数が、本屏風絵の馬の頭数と一致する。おそらく、この右端に描かれた馬は、覚一本のような語りを踏まえて描かれたものだろう。

もし、このように考えることができるならば、本屏風絵には、『盛衰記』のような文脈と覚一本のような文脈との二つの文脈が存在していることになる。しかし、見てきたように、主であるのは占形の文脈である。では、なぜ覚一本のような文脈が描かれているのか。そもそも絵画制作主体はどのような意図をもって描いたのか、または描いていないのか。絵画制作主体の先行する絵画テキストや文字テキストとの対話の問題がそこにはあるだろう。この問題については、今後の課題としたい。^{*4}

四 後景に退いた絵相―画面構成による語り

義経の馬落としの絵相に関わっては、もう一つ検討しておきたいことがある。見てきたように、馬の絵相は、義経の占形を語り出し

ている。しかし、馬の体が霞や館によってほとんど見えていない。

つまり、馬落としの絵相は、霞や館の後景にあるということであり、逆に霞や館はその前景にあるということである。では、前景にある絵相とは何かとえば、上述してきた指差ししの兵の絵相である。このように本屏風絵は、前景と後景といった画面構成によっても義経の坂落を焦点として語っている。

こうした語り方は、他の場面の配置にもうかがうことができる。他の屏風絵では、坂落の下に配置されている鹿を射る武知のモティーフが、本屏風絵では坂落の下に配置されていない。

例えば、一六世紀後半に制作され、江戸時代の「一の谷・屋島合戦図屏風」の先行作品として評価されている智積院本や一七世紀初頭に作られた埼玉県立歴史と民俗の博物館本「源平合戦図屏風（右）」では、本モティーフは坂落の下に配置されている。覚一本『平家物語』では、「里ちかからん鹿だにも、我等におそれては山ふかうこそ入るべきに、是程の大勢のなかへ鹿のおちやうこそあやしけれ。いかさまにも山の上より源氏おとすにこそ」とさわぐところに、「とあるように、本モティーフは義経の坂落と関わるものである。しかし、本屏風絵では、画面左の館の奥に配置されている。もちろん、館の背後で起きたこととして解釈され配置されているが、しかし、『平家物語』で語られているように、坂落と一つながりのものとしては語られていないのである。このモティーフの配置の移動も、おそらく、坂落を強調しようとしたために起こったことではないだろうか。

同様に、陣をとっている武将たちの下に配置された、小宰相との

最後の名残を惜しむ通盛の場面についても言及しておきたい。本モティーフも、埼玉県立歴史と民俗の博物館本では、鹿を射る武知の右下に描かれるなど、坂落と親和性の高い場面として解釈され配置されている。それは、能登殿の諫言（「只今も上の山より源氏ざつとおとし候ひなば」）に坂落の事が暗示されているからだろう。しかし、本屏風絵では、坂落の下には配置されていない。本モティーフは坂落前夜のことであり、坂落直前を焦点化して語ろうとする構図には合わない。坂落直前の時間を強調しようとするすると、本モティーフは移動させざるを得ないのである。本モティーフの移動についても、上述同様、坂落の強調が関わっているだろう。

以上、馬落としてのモティーフが後景に退いていることをきっかけに、武知のモティーフと通盛のモティーフが坂落の下に配置されていないことを諸本と比較しながら指摘した。それらのことから、改めて本屏風絵制作主体の坂落を優先し描こうとする指向性をうかがうことができることを述べておきたい。

五 無人の平家の館—語りの創造

最後に、平家方の館について見ていきたい。指差し¹の兵が上がっている館の中は、平家の武将や兵士たちが誰もいない。一對の弓と箆があるのみである。（下図）

この弓と箆は、床の間の前に整えられて置かれていない。特に弓は立てかけられているのではなく、畳の上にある。この弓の向きに注目すると、その方向は館の外を向いている。館内から弓の方向に

沿ってそのまま視線を移すと、館の前で陣を取る將軍たちにつながる。この弓は、館の外にいる陣へ視線を動かすものとしてある。

では、館の外はどのようなになっているか。

この館の手前には、陣をとる平家の武将たちが描かれている。また、弓を張る姿も見られ、出陣に備えている様子でもある。この中で注目されるのが、指差し

をして武将に何かを報告している兵の姿である。報告を聞いている武将は、身を乗り出して聞いているようにも見える。さて、ここでも、指差し¹の画像が配置されているのだが、その指差しは右手の方に向かっている。つまり、大手の方（生田の森の合戦）を指しているということになる。大手の方は只今合戦の真つ最中。「大手の將軍範頼の指揮のもと突進する源氏方と、城門を開けて迎え撃つ平家方とが入り乱れて斬り結^{*5}」んでいる。指差し¹の兵は、そうした生田の森の合戦状況などの報告をしているのだろうか。指差し¹の兵は、平家方が、生田の森の合戦に集中していることを語っている。



さて、このようにみると、平家の武将達は、館から出て生田の森の合戦に備えていると読むことができる。そのことは、一方で、坂落の方には、注意を向けていなかったということもなる。坂落と屋上の兵とが結びつけられ、今将に坂落が行われようとしていると読んだ鑑賞者にとって、無人の館は、平家方が生田の森の合戦に集中し、坂落の方に対しては無警戒であったことを語るものとしてあるだろう。

では、本屏風絵のように、兵士不在をもって平家方の坂落への無警戒を語る手法は、他の絵画にも見られるのだろうか。本屏風絵よりも古いもので、大倉集古館蔵『平家物語図扇面散らし屏風』（桃山時代・一七世紀）には、『平家物語』の有名な逸話を描いた扇絵が十二枚貼られている。そのうちの一つが「坂落」で、扇状の画面左に崖の上にいる義経軍、真ん中下に義経の落とした馬一頭、そして画面右に無人の見張り台、そしてそこに弓三つと箆が見えるように描かれている。坂落に対し、無人の見張り台を描くことで、平家の坂落への無警戒を語っている。さらに、この構図は、義経に関わるエピソードを集めた、馬の博物館蔵『義経記図屏風』（一七世紀）にも描かれている。

また、注目されるのが、先に見たケルン東洋美術館本である。ケルン本にも同様の図像があることが指摘されている*。

館の後方に見張り台があるが、ここには見張りが誰もいない。垣桶もすべて右側（大手軍）の側を向いている。館の後側はまったくの無防備であった。

さらに、ケルン本は、無人の見張り台だけでなく、本屏風絵と同じように生田の森の合戦に備える陣営を描いている。

（本場面は一引用者註）生田の森の合戦での平家の陣営を描いたもの。指揮をするのは生田の森の大將軍の知盛だろう。弓を構え、源氏の大手軍を待つ様子が描かれるなど、平家軍の備えは整っていたようで館の後方（画面左）とは対照的だ。

このように館後方に見張り台を無人にしたり、それとは対照的な生田の森への陣営を描いたりすることで、坂落への無警戒を語る手法は、本屏風絵が制作される以前から存在し、また本屏風絵と同時に作品にも受け継がれていったものであった。そうした中において、本屏風絵は、無人となった館を描いている。管見の限りでは、このように無人の館を描いて、平家の無警戒を語っているものはみあたらない。この点が本屏風絵の特異な点といっていいたいだろう。

ところで、こうした平家の無警戒は、文字テキストではどのように語られているだろうか。覚一本にはそのような描写はないが、例えば、『盛衰記』では次のようにある。

▼『源平盛衰記』

その後三千余騎、手綱かい繰り、鎧踏張り、手をにぎり、目を塞ぎ、馬に任せ、人に随ひて、劣らじ、劣らじと落しけるに、（中略―引用者）平家の城廓に乱れ入りて縦ざま横ざま、蜘蛛手十文字に馳せ廻り、喚き叫びて戦ひければ、城中には東西の城戸口ばかりこそ

防ぎけれ、さしも恐しき巖石より敵寄すべしとも思はざりければ、打延べて左右の城戸口の弱からん時軍せんとて鎧・物具、脱ぎ置き、小具足ばかりにて居たる所へ、ばと寄せ、咄と鬨を造りたれば、

『盛衰記』では、「東西の城戸口」ばかりを防いでいたこと、そして、鴨越からは敵は攻めてこないだろうと思っていたので、城戸口が危なくなつたら加勢をしようと、武器を身につけていなかったことが語られている。本テキストでは、無警戒に加えて、平家方の気の緩みや慢心が語られている。

また、本屏風絵よりやや時代は下るが、江戸時代の通俗軍記作者馬場信意の撰になるとされる『義経勲巧記』（初版一七二二年、他に一七二二年版あり）には、次のようにある。

城中ニハ二方ノ城戸口へ軍勢ハ悉ク向ヒヌ。残り留マリシ者トテハ行歩モ叶ハヌ老者、又ハ女童ノ類ヒナレバ、コハ如何ニセント驚キテ、周章騒グケニ、源氏ノ勢乱レ散テ此ニ顕ハレ彼ニ隠レ喚キ叫ンテ戦ヒシカバ、山彦ノ響キヲカリテ多勢ノ躰ニゾ見ヘタリケル。義経常陸坊海存ヲ召シ城中空虚ナリト覚ユ。急ギヲビヤカセヨト宣ヘバ、

「二方ノ城戸口へ軍勢」が悉く向かっていたこと、したがって館には老者、女童のようなものしかいなかったことが語られている。城戸口に軍勢が向かっていたことは、『盛衰記』と同様だが、平家方の気の緩みや慢心は語られていない。むしろ城戸口の攻防に集中して

いたといえる。

このように見ると、本屏風絵の語りは、『義経勲巧記』に近い。本屏風絵では、館の上で指差しをする兵以外は、生田の森の合戦に備えて、館は空になっている（「城中空虚ナリ」）。本屏風絵の鑑賞者は、『義経勲巧記』のような物語を想起したことだろう。

『義経勲巧記』は、『吾妻鏡』や『盛衰記』等の当時としては正史に近いと思われていた書に依拠して著述されと考えられてきたが、偽書の『盛長私記』に依拠している可能性も指摘されているもので、複数のテキストを踏まえながら書かれたものである。本屏風絵が、『義経勲巧記』に依拠しているということではないが、『義経勲巧記』も含めた義経をめぐる物語が新たに創造されていった中で、本屏風絵は成立し、そして本屏風絵も新たな語り方で義経の坂落を語ろうとしていると考えることはできないだろうか。時代考証等の課題はあるが、その語り方からそのような可能性をうかがっておきたい。

以上、みてきたように本屏風絵は、館から出て大手軍との戦に備える陣と、一方で無人になった館を描くことで、平家方が大手との戦に専念し、鴨越には無警戒であったことを語っている。そして、その語りは、義経をめぐる物語が創造されていく中で、新たに作られていったものではないかと推測される。

六 おわりに

本稿では、画面②の絵相について検討を加えてきた。みてきたように、画面②は、平家の兵による坂落の発見、義経の馬落とし、無

人の平家の館、そして、大手との戦いに備える平家軍、主にこうした絵相によって構成されている。中でも象徴的であるのが、屋上の指差しをする兵で、この図像は本屏風絵独自のものであり、本図像があることで、坂落の直前が強調されるものであった。

前稿で確認したように、覚一本『平家物語』では、一の谷合戦において、同時多発的に生じた出来事の一つ一つを語っている。屏風絵においても、例えば、先行絵画である智積院本、天真寺本、大英博物館本などは、個々の逸話を集めて描いている。^{*8}しかし、本屏風絵は、屋上の指差しの兵によって鑑賞者の視線を誘導し、馬落としてのモチーフを後景に配置したり、武知や通盛のモチーフを移動したりすることによって、一の谷合戦の全体の中で、義経の坂落を強調、特化して語っている。さらには、前稿で確認したように、霞や山の稜線によって鑑賞者の視線を誘うことで、坂落の見せ方を工夫し、演出している。こうした坂落を中心とした語りが本屏風絵の特徴であろう。

では、そうした語りは、いかなる文字テキストや絵画テキストとの対話によって、またはどのような状況の中で、生み出されたものなのだろうか。詳細は明らかにできていないが、みてきたように本屏風絵制作主体は、複数の文字・絵画テキストと対話しつつ、本屏風絵を描いていると考えられる。また、それまでの『平家物語』や『盛衰記』だけが享受されていた状況ではなく、それらを踏まえつつも新たに義経の物語が作られていった状況の中で制作されていたということも考えられる。先に見た『義経勲巧記』だけでなく、『義経知緒記』（江戸初期から元禄頃^{*9}）や『異本義経記』では、若い頃か

ら勇猛で軍法を極めた義経の事跡として、鴨越を落とし一の谷の城郭をやぶって平家を追討したことが語られている。絵画においても馬の博物館蔵『義経記図屏風』など義経の事績を描いたものも作られている。こうした源氏側の、とりわけ義経の事績としての一の谷合戦の語りとその創造、こうしたものが本屏風絵の語りには関わっていないのであろう。しかし、本稿ではその内実や全体像を明らかにすることはできなかった。今後の課題としたい。

また、課題としては、屏風絵全体の語りが解明できていないこともある。義経の坂落が強調、特化されているとはいえず、先行研究で指摘されているように、本屏風絵の独自性は「他の諸本より一扇分大きくスペースをとって描かれている」生田の森の合戦にもある。また、個々の逸話が形骸化して描かれている中で、画面左奥には、「敦盛の最期」がはっきりと描かれている。さらには、その「敦盛の最期」の背後に描かれた民家のような家（塩家か）や直実が通ってきたかみえる道（田井の畑か）など、まだ明らかにしていないものがある。本屏風絵は、義経の坂落を強調、特化しているとはいえず、その語りは多声的である。その声の一つ一つ、さらにはそれらの重層性や関わり合いなど、今後明らかにしていくことは多い。

以上、本稿でも課題が残ったが、兵庫県立歴史博物館本「源平合戦図屏風（一の谷合戦図）」の〈絵語り〉に関する覚書としておきたい。

〔附記〕前稿同様、「源平合戦図屏風（一の谷合戦図）」の掲載について、兵庫県立歴史博物館、また、当館学芸員前田徹氏から格別のこ

高配を賜った。この場を借りて厚く御礼申し上げる。

○依拠本文

- ・覚一本…岩波文庫　・百二十句本…新潮日本古典集成
- ・源平盛衰記…『新定源平盛衰記』（新人物往来社、一九九一年）
- ・義経勲功記…『軍記物語研究叢書 未完軍記物語資料4 義経知緒記・義経勲功記』第四卷（株式会社クレス出版、二〇〇五年）

〔註〕

- *1 拙稿「兵庫県立歴史博物館本『源平合戦図屏風（一の谷合戦図）』の〈絵語り〉に関する覚書（一）―老翁との対面場面から坂落の場面まで」（『国語教育研究』60号、広島大学教育学部国語教育会、二〇一九年三月）
 - *2 出口久徳「一の谷合戦図屏風を読む―ケルン東洋美術館本を中心に―」（『中世文学』第45号、中世文学会、二〇〇〇年八月）
 - *3 神奈川県立歴史博物館蔵奈良絵本『平家物語』（一八世紀）の「坂落」では、画中人物の向き（目線）によって、坂落に注目させる手法も確認される。
 - *4 義経の馬落としての意図と頭数、結果については、文字・絵画テキストにおいて複数のバリエーションがある。
 - *5 前田徹「いくさ場の描かれ方―兵庫県立歴史博物館本一の谷合戦図屏風」（兵庫県立歴史博物館紀要『塵界』第二十二号、二〇一一年三月）
- *6 註2 出口論文。

- *7 岡田美穂「第四卷 解説」黒田彰、岡田美穂編『軍記物語研究叢書 未完軍記物語資料4 義経知緒記・義経勲功記』第四卷、株式会社クレス出版、二〇〇五年）

- *8 諸屏風絵は次を参照。川本桂子「『平家物語』に取材した合戦屏風の諸相とその成立について」（『日本屏風絵集成第五卷 人物画 大和絵系人物』、株式会社講談社、一九七九年）、田沢裕賀「平家物語 一の谷・屋島合戦図屏風の諸相と展開」（『秘蔵日本美術大観1 大英博物館1』、株式会社講談社、一九九二年）。

- *9 註7 岡田論文。

（広島大学附属福山中・高等学校）